



◎『越前往来』
1810年 福井大学附属図書館蔵



◎『名物往来』『合書往来』
1886年 福井県立文書館蔵
「凡、北国之服食名物者(は)、若狭芍薬・蓮肉・同所之香附子(こうふし)・北浜酒・同筆、越前切石・烏子・奉書、今庄之葛、府中之錦・同嶋布、金津鉄・鵜(けぬき)と若狭・越前からはじまって加賀、越中、越後、佐渡の各所の産物が列挙されています。写真のものは明治に入って刊行されたものです。」



◎『越前往来』
1862年 福井市立郷土歴史博物館蔵



◎『福井町尽』往来物倶楽部(小泉吉水)蔵

ふくいの往来物

19世紀に入って寺子屋が全国的に増えてくると、安定した需要が見込める往来物は、三都(江戸・大阪・京都)の書店で多数刊行されるようになります。地方にもこれらを売りさばく書店が現れ、またみずから版を起こす者も出てきました。

福井県内で出版された往来物では、福井西米町東角の会津屋清右衛門による『福井町尽』◎が知られています。「赤坂・七軒町・木田春日町・新町・辻町・鍛冶町」と福井城下の町人町を南から列記し、九十九橋の北では右回りに城をまわるように町名が挙げられており、「大名小路」などの武家地も含まれていました。

さらに、出版こそされませんでした。越前国内の名所や産物を取り上げた往来物が著わされていました。1810年(文化7)に書かれた『越前往来』◎は、敦賀郡からはじまり、郡ごとに各地の主要な社寺や城跡・旧跡を紹介しています。調点と一部に読みはついていますが、難解な語句の多い漢文体で書かれていました。その「自序」では、近年「往来帖」と題して三都を中心に神社・仏閣や名産を記載して子どもまでが楽しんでいるが、自国の古地や名蹟を知らない者が多いと、執筆のきっかけを述べています。都市部の旺盛な往来物の刊行が、みずからの地域の歴史や地誌を子どもたちに伝えようとする契機になっているのは興味深いことです。

この50年ほど後に記された同名の『越前往来』◎(1862年)は、越前の町や村の150を超える多彩な産物が書き上げられ、はるかに平易で親しみやすいものになっています。

すでに金沢で安政年間(1854~60年)の少し前から刊行された『合書往来』のなかに北陸各国の産物を取り上げた『名物往来』◎が記載されていました。前半に産物を列記し、後半に諸国・外国との交易や国内の経済的な繁栄、名所・名刺に触れる構成は、『加賀往来』(1854年)などと似ていることから(『往来物解題辞典』)、これら既刊の書物を参照していた可能性も十分考えられますが、日本海海運による蝦夷松前からの珍品や秋田米の入津、さらにはアメリカなど外国との交易まで触れている点は、開国後の時代感覚を映したものとみることができます。

取り上げられている産物は、量的な広がりがあるものではありませんが、福井の絹・袖、丸岡の木綿車(木綿繰り糸か)・同鬘附(油)、府中の布・綿・色紙・烏子(紙)・干しうどん・鎌・竹皮笠、大滝の奉書紙、金津のくぎぬき、松岡の鍋釜、織田の瓶、東郷の米穀、味見の蕎麦、尺谷(笏谷)の切石、勝山の煙草などが語呂よく並べられています。

これ以外の往来物では、さらに同名の異本で、敦賀の気比神宮から越知山、福井城下、三国、吉崎、永平寺、平泉寺、白山と名所をまわる趣向の手紙文の『越前往来』、大野藩の年頭儀礼や海岸部の大野藩領の村むらを含めた産物をうたった『大野往来』などが知られています。

